

みなさまのご協力、ありがとうございました！

生殖医療センターの診察が、 中央館5階に移りました

保険適用のおはなし

令和4年より、不妊治療に保険が使えるようになりました。基本的な診療については保険が適用されます。**高額療養費制度**の利用も可能になりました。

当センターの診療

健康保険の適用年齢とは別に、当生殖医療センターでは治療効果など医学的な面から、治療対象年齢を独自に45歳未満と設けております。健康保険はもちろんご使用いただけますが、当センターでの診療・治療は45歳未満(44歳12か月まで)となります。

健康保険の適用

患者さんによっては先進医療(特別に自費診療・保険診療が併用可能な治療)と、保険診療の併用も可能な場合があります。費用などが異なる場合がありますので、詳しくは生殖医療センターへご相談ください。

不妊症と診断され、 治療開始時点の女性の年齢が	40歳の 誕生日	43歳の 誕生日
一般不妊治療 (体内で受精)	保険使用回数制限なし	
生殖補助医療 (体外で受精)	胚移植 6回まで 以降は自費	胚移植 3回まで 以降は自費
保険適用		

2022年4月の保険適用によって、不妊治療にかかる費用を行政が助成する制度は基本的に無くなりました。

頼れるドクター 大阪・堺

Vol.6 112p

書店・コンビニ・Amazonなどにて好評発売中！電子書籍あり
QRコードよりWEB版もご覧いただけます ▶▶▶▶▶▶▶▶



ネット予約はQRコード、
または で検索！

生殖医療センター

平日 9:00 ~ 16:30
(初診は16:00まで)



06-6692-0311

産科・小児科のQ&A 先生に聞いてみたいアレコレ募集中!!

きらりでは、診療中には聞きにくいギモンや、子育てに関するウワサの真相など、産科・小児科の医師に聞いてみたいことを募集中です！

応募方法
QRコードを読み取り、「メール作成画面はこちら」をクリックしていただくでメール作成画面に移動します。件名はそのまま、聞いてみたいことを入力して送信ください。個人情報の入力には不要です。



医療機関の皆様へ

住吉母子医療センター「きらり」の設置にご協力頂ける医療機関様を募集しております。設置にご協力、または送付をご希望される場合は、下記QRコードよりお申込みください。



お問い合わせ

地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター
大阪府市共同 住吉母子医療センター 〒558-0056 大阪府大阪市住吉区万代東 3 丁目 1-56
06-6692-1201 (代表) 平日 9:00 ~ 16:30

大阪急性期・総合医療センター
住吉母子医療センター presents

Kirari

きらり

vol.
16

2023.04



バックナンバーは

産科・婦人科医の

知っておいて
ほしいおはなし

＼トラブルと母子手帳／
**妊娠中から
母子手帳を大切に**

母乳育児の神秘

15.

地震、台風、豪雨…
**災害時の乳児栄養と
母乳育児支援**

小児科マメ知識

**小児科
おしえて
ドクター！**

腹痛シリーズ3

腹痛と血便 その2

小児科
おしえて
ドクター！

“ねじれる”怖い病気シリーズを2回続けてご紹介しました。が、今回は血便の話に戻ります。

やや強めの腹痛と下痢、ときには発熱もともなうて血便がでた場合、細菌（バクテリア）が感染して腸炎を起こしていることが1つ考えられます。この細菌性腸炎では、腹部のエコー検査をすると、大腸の壁がぶ厚くなっていたり、その周囲のリンパ節が腫れていたたりするのが見られるので、とても参考になります。

便に血が混ざるほどの腸炎を起こす細菌には、代表的なものとして、カンピロバクター、サ

ルモネラ菌、病原性大腸菌（腸管出血性大腸菌）があります。カンピロバクターは、ウシ、ニワトリ、イヌ、ネコなどの身近な動物が保菌しています。加熱不十分な肉（牛肉、鶏肉）やそれに接した食べ物を食べると数日から1週間以内に腸炎の症状がでます。イヌやネコに汚染された環境の水からの感染も知られています。

サルモネラ菌は自然界に広く分布し、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類などさまざまな動物に感染しています。サルモネラ菌に汚染された食べ物（とくに鶏卵、牛肉、乳製品で十分な加熱処理がされていないもの。生肉、生卵）を食べて数日で腸炎の症状がでます。イヌ、ネコ以外に爬虫類（カメやイグアナなど）や両生類などのペット動物からの感染も知られています。

腸管出血性大腸菌は、家畜とくにウシで保菌率が高く、生肉（ユッケ、刺身）や加熱の不十分な牛肉はもっとも注意が必要です。少量の菌の摂取でも腸炎を起こすことがあります。また腸炎にかかった人の便から人につうつることもあります。腸管出血性大腸菌という名前より、

腹痛と血便
その2

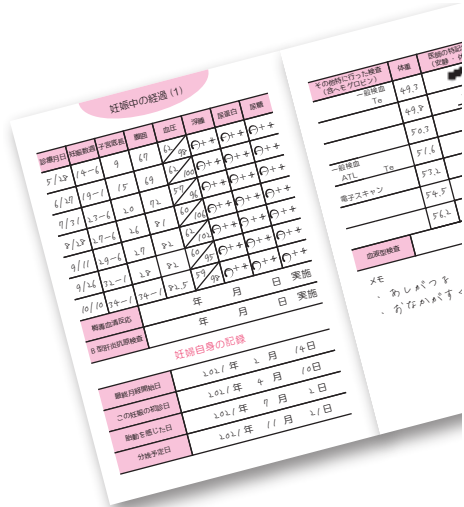
妊娠中から母子手帳を大切に

2022年10月31日の早朝にランサムウェアによる攻撃を受けて、病院のコンピュータシステムが完全に停止しました。23年1月後半にはほぼ完全に復旧することができ、現在はもとどおりの診療が行えるようになりました。患者の皆様には大変ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

当センターの多くの診療科では、初診患者さんの受入れを中止し、システム障害発生後しばらくの間は、入院を予定していた方の受入れもできない状態となりました。しかし、産科では、分娩を控えた妊婦さんの妊婦健診やお産が始まった場合の入院受入れは延期できません。また、急に他院に振り替えていただくことも容易ではありません。

そのため、ご本人の希望や、特殊な場合を除いて、ほとんどすべての方の妊婦健診や分娩をそのまま継続しました。しかし、これまでの検査結果をはじめ、すべてのカルテ記録を見ることができなくなってしまうため、妊婦さんが来られても、分娩予定日がいつで、今どんな問題があるのかということさえわからないという状態でした。

そんなときにたいへん心強い情報となったのが母子手帳です。



O157やO103と聞いた方が分かりやすいかもしれません。大腸菌の表面にあるO抗原の種類で番号がついています。ご存じのようにO157などでは腸炎にとどまらず、溶血性尿毒症候群や脳症を合併することがあり、最悪の場合死にいたることがあります。3類感染症で保健所に届け出なければなりません。

今回紹介した血便を起こす3つの細菌性腸炎で共通して言えることは、牛肉や鶏肉は十分に加熱して（75℃以上、1分以上）食べることが重要だということです。焼き肉や焼き鳥を外食しに行った後に下痢・血便の症状がでて受診してくる子どもをよく経験しますので注意したいですね。

次回は、その他の子どもの血便についてお話します。

75度以上で、1分以上加熱しましょう

	おきな宿主	注意が必要なもの
カンピロバクター	ウシ ニワトリ イヌ・ネコ	加熱不十分な肉（牛肉、鶏肉）やそれに接した食べ物を食べる
サルモネラ	哺乳類・鳥類 爬虫類 両生類など	鶏卵、牛肉、乳製品で十分な加熱処理がされていないもの。生肉、生卵、ペット動物
O157 O103	家畜 とくにウシ	生肉（ユッケ、刺身） 加熱の不十分な牛肉は要注意！

分娩予定日はもちろん、これまでの妊婦健診時の血圧や尿検査の結果、子宮の大きさ、それに注意点が記録されていますので、これを見ることで、正常に経過している妊婦さんであれば、そのことが一目でわかります。また、当科では、妊娠初期に行った血液検査の結果をシールに印刷して母子手帳に貼っていたようにしていますので、血液型をはじめとする重要な情報も確認することができました。

母子手帳は日本で始まった妊婦さんの診療記録を妊婦さん自身に携帯していただくための手帳です。出産後は、お子さんの予防接種の記録や、成長の記録を残していくことができるようになっています。診療記録や検査記録は、本来患者さん自身のもので、患者さんが自由にしたり利用したりできるようにしているというのが現在の流れですが、妊婦さんについては、母子手帳を使うことでそれが当たり前にずっと行われてきており、今回のようなトラブルの際にそれが大変に役立つことになりました。

ご自身とお子さんの大切な記録であり、何かの時には、そこに記入した情報がとても役にたつことができてきます。母子手帳をよく読んで、ご自分で記入するところは漏れないように記入を行い、妊婦健診や、お子さんの健診のたびの医師や助産師の記入も確認するようにしてください。

母乳育児の神秘

15.

地震、台風、豪雨…

災害時の乳児栄養と
母乳育児支援

今回は、災害発生時の乳児栄養と母乳育児支援についてのお話です。

災害発生直後には、まず乳児用人工乳とその調乳に必要な物資の確保、またそれらが確実に必要とする場所に迅速に届くよう手配する必要があります。

非衛生的な環境下での調乳や人工乳の使用は、感染性胃腸炎の発生や流行が懸念されます。調乳には安全な水、容器、熱源（コンロなど）も必要です。その点、液体ミルクは常温（JIS規格：5℃〜35℃）で保存可能なため衛生面では優れていますが、開封後雑菌が急速に増殖するため、飲み残しは廃棄しなければいけません。

母乳栄養中のお母さんに適切な情報と支援を提供しないまま必要以上の量の人工乳を配給すると、母乳分泌量を減らしてしまいかねません。人工乳は責任のある単一機関が管理することで、必要な乳児や養育者へのみ支給されるようにすることが望まれます。

母乳中の免疫物質は、非常事態で蔓延しやすい腸管感染症のみならず呼吸器感染症からもあかちゃんを守り、結果的に周囲の人に伝染することも減ります。また母乳栄養児への支援物資は少なくすむため、母乳栄養児の割合が多ければ多いほど、その他の支援に注力できるようになります。

災害時には一時的に母乳分泌が減ることがありますが、それは生理的な防衛反応であり、安心して頻繁に授乳できる環境を提供するなどの配慮があれば分泌の回復が期待できます。それまで混合栄養だった場合でも、より頻繁に授乳することによって母乳分泌量の増加が期待できます。

もし、お母さんが十分な食事を摂れない場合でも、数週間程度であればそれまでと変わらない成分（栄養・免疫）の母乳が分泌されますが、授乳中のお母さんには優先的に水と食糧を供給されることが望まれます。また、避難所に授乳中の母子のために、簡便であつてもブライバシーが保たれる授乳スペースの確保はとても重要な課題です。

出産後1年以上経っていても、母乳にはそれまでとほぼ同等の免疫物質と栄養素を含んでいるため、安全な水や離乳食や食事が手に入るまでの期間は、1歳以上の乳幼児でも母乳だけで切り抜けることができます。母乳が出なくなったら人工乳をあげれば良い、という発想ではなく、「母乳が出る環境を整える」ことが、災害時には、最大限にあかちゃんを守ることに繋がります。